

【ねがいましては】

平成20年11月25日

KYOWA SCHOOL

第217号

「自分の家」

「ただいま」・・・何の返事もない家。真っ暗な部屋。子どもが家に帰ってきたとき、「ただいま」と言って返事がない家。どんなに豪華絢爛な家でも、どんなに頑丈な家でも、子にとっての本当にあってほしい家とは・・・。

「おかえり」と返事の帰ってくる家ではないでしょうか。

物心がつき、おうちの人が働いてこそ今の生活があるのだとわかってはいても、一度でいい、「お帰り」と言ってくれる人が家にいてくれたら・・・。子どもたちは結構つらい気持ちを心にしまいながら生活しているようです。

「しかたがないから・・・。」と言ってはみても、毎日のように心を通り抜ける冷たい風・・・。

一人で食事をし、一人で風呂に入り、ひとりで就寝の準備をし、会話するわけでもなく、テレビから流れてくる声を聞きながら眠りにつく頃、「ただいま」と言って帰ってくる母・・・父・・・。

『現実』という、動かすことのできない、重い、重くてたまらない大きなものと日々戦っていらっしゃるお父さん、そしてお母さん。

『しあわせ感』これをじっくりと考えてみると、今の子どもたちは、あまり・・・という結果が生まれてきてしまいます。

今、放課後という言葉が死語に向かっているような気がいたします。子どもたちを見つめていると、1年生から3年生は、放課後即学童保育クラブ、「自分の家」には帰れません。4年生から後、部活動が放課後を埋めるようになります。中学・高校とその生活は続きます。

社会の中に出来上がった子どもを受け入れる場所は、いつのまにか「家」を遠いところに追いやってしまうようなことになってきているようです。女性の社会進出は子どもの居場所を変化させてしまったのでしょうか。

このようなことなど、言われなくてもわかりきっていると、当たり前のように感じていらっしゃることと思います。その穴を埋めようと、せめてもの土曜日、日曜日・・・。しかし部活動はその休日さえも奪い取るようなことになってきました。せっかくの休日、ご両親は子のいない家で静かに時を過ごします。

部活動に励む子どもたちも、その違和感を麻痺させています。あの子もこの子も、みんな土曜日・日曜日、部活に出ている。それが当たり前なんだ、と・・・

親と子がじっくりと向かい合える時間。その時間は、子が成長していく過程で、『ひと』として成長を遂げる大切な『土台の時間』なのではないでしょうか。どこかへ出かける、何かを買い与える。それよりなにより、子が望んでいることは、親と一緒にいられること・・・。そしていろいろなお話ができること。いろいろなことを一緒にできること。世界でこの人が一番大切な人なのだと、心の底から感じられるよう触れ合うこと。

人と人の向き合い方を肌で感じる時間こそ、必要な気がいたします。

私は、この教室を『自分の家』と感じていただけるよう子どもたちと接しているつもりです。家を切り盛りするには『助け合い』が必要です。わたし一人ではこのような大勢の子たちの面倒など見られたものではありません。ここは勉強が主体の生活の場所かもしれません。であつたら、勉強の中で助け合うことを実践し、勉強を通じて人と人とのつながりを育てて生きたいと考えています。

競争（評価）を通じて伸びる伸び方（現在の義務教育現場）に、助け合いを通じて伸びる伸び方を、肩を並べせながら、子どもたちとともに、ニコニコしながら歩いてみたいのです。「人と人が信頼しあいながら生きるって、こんなに幸せなんだよ。」「人を助けながら生きられるって、こんなに幸せなんだよ。」「人を笑わせようと思って生きるって、こんなに幸せなんだよ。」「自分の欲などどうでもいい、人の喜ぶ姿を見ることが、自分の喜びなんだ。」「みんなみんな、人が人のことを思いながら生きるんだ。」

少し大げさに書きすぎたかもしれませんが、このような想いに包まれながら生活できたらと思います。

その芽が大きく育ったとき、疲れた表情で帰ってきた母の目の前で、「お帰り」と言ってニコッと笑う子がいるのではないのでしょうか。「疲れたでしょ、お母さん・・・ありがとう。」「・・・」

本当にこの家に生まれてよかった。本当にこの母に会えてよかった。そう思える子がここには溢れているような気がいたします。

最近子どもたちにお話したことの中に、『気』があります。中学生の時間だったと思います。

「気を配ろうね。元気の『気』を配ろうよ。活気の『気』を配ろうよ。やる気の『気』を配ろうよ・・・。それを称して『気くばり』っていうんだよ。みんなみんな、そんな気くばり屋さんになったら、この世の中から、いじめや犯罪などなくなるのだろうね。それには『ちいさな勇氣』が必要だね。」

栗田ランチのとき、洗い物をする子の傍らに、いつのまにかいる器拭きの子。誰が頼んだわけではない、自然と起こり始めた現象。質問しにきた子に私が指導し終えると、必ず聞こえるようになった「ありがとうございます。」

誰もそう決めたわけではないのに・・・。こちらこそ・・・「ありがとう、みんな。」